Lead

All roads lead to the future　リード

高知大学
Kochi University

コミュニケーションペーパー
2020 Spring 春号
No. 032

¥0 TAKE FREE

〈特集〉

〈特集1〉
地域連携の新しいカタチ
高知大学地域コーディネーターUBC

〈特集2〉
土佐あかうしの今

がんばる先輩
FMラジオ局のDJとして声に包んで情報発信

キラ星高知大生
「地域観光チャレンジ2019」金賞受賞
ツアー企画で地域の課題を解決したい！

Kochi University Topics

Photo：第3回高知大学フォトコンテス応募作品「はれのひ」

〈特集1〉

地域連携の新しいカタチ UBC

高知大学地域コーディネーター

University Block Coordinator

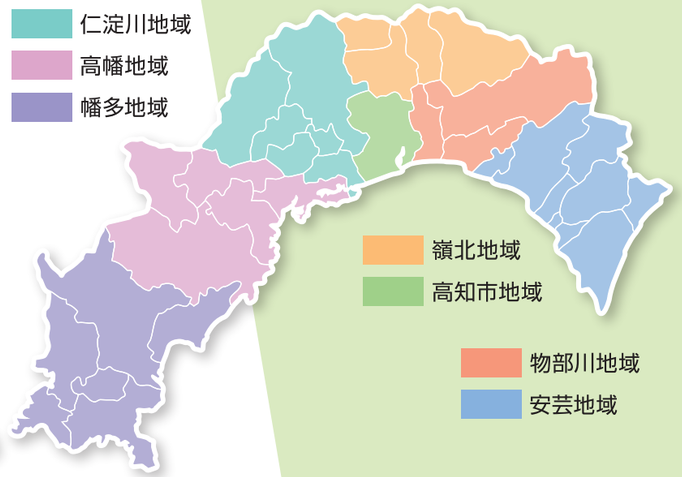
大学はキャンパスにあるもの。そんな"あたりまえ"の常識を超えるため高知大学では県内7地域にサテライト・オフィスを設置。その最前線で、UBC(高知大学地域コーディネーター)の4人の教員が活動しています。教員が地域に駐在するという、世界の大学を見ても類のないUBCの取り組みについて紹介します。

「地域の大学」として、「スーパーリージョナルユニバーシティ」を目指している高知大学。地域と密着した全国トップの大学になるべく、地域への貢献をミッションとして掲げています。そこで立ち上げたのが「KICS(高知大学インサイド・コミュニティ・システム)」化事業です。

KICSには、高知大学が地域に深く入り込むというメッセージが込められています。キャンパスが県中央部に集中している本学では、東西に広く、中山間地が多い高知県の課題や要望を丁寧に拾い上げることは困難でした。そんな"地理的障壁"を解消するため、本学では2013年度から県内7地域にある県庁の産業振興地域本部内にサテライト・オフィスを設置させていただき、UBCが常駐を始めました。

UBCの役割は地域からの相談を学内と橋渡しすること。産学連携や地域協働のための課題の掘り起こしや課題解決のアドバイスなどに取り組みます。また、地域をフィールドとする教育・研究のサポートも行います。

学生と地域活性化に取り組みたいという地域ニーズは多数あり、そのマッチングもUBCの重要な役割。地域で活動をしたい学生にとっても、UBCのネットワークは強力な味方です。他大学のコーディネーターとの大きな違いは、地域と一緒に問題解決をすることを活動の第一義としていることでしょう。学生や研究とは関係がなかったとしても、地域から寄せられる課題を総合的にコーディネート。大学が担うべき社会貢献の具現化を使命としています。



4人のUBCは異なる専門領域を持っていて、専門性を活かしながら、あるいは互いに相談しながら、地域の課題と向き合います。UBCが駐在することにより、大学で待っていては見えてこない課題が浮かび、新たなプロジェクトがいくつも立ち上がりました。4人で年間60件ほどのプロジェクトに関わっています。これまでとは違う新しい地域との関わり方が、地域の学び舎としての高知大学の役割につながっています。

地域をよく知る第三者として全体最適を目指す

●高幡・幡多地域サテライト・オフィス

総合科学系地域協働教育学部門
地域コーディネーター　准教授

岡村 健志（おかむら けんじ）

高知県出身。高知大学農学部卒業。千葉大学大学院自然研究科環境計画学専攻修了。高知工科大学工学研究科博士後期課程基礎工学専攻修了。シンクタンク、コンサルタント、高知工科大学助教などを経て、2014年より高知大学に着任。専門は土木工学、社会・安全システム科学。

—印象に残っているプロジェクトは何ですか?

●**岡村**／5年以上前から現在も続いているプロジェクトで、黒潮町公式サイトの運営支援です。最初はサイトをリニューアルしたいということで、企画とプロデュースとして参画しました。ただ、サイトを作ったはいいが、中身の更新がされないということが起こりがちです。何を伝えたいかを明確にしないと、作っただけで終わってしまうことになりかねません。そこで、サイトをどのように使いたいのか、黒潮町の担当者と一緒に考えるところから企画を始めました。

リニューアル後、最も大きく変わったのが記事更新の頻度です。現在、毎月50本近い記事を専任の担当者たちが更新しています。記事更新を支えている一つの仕組みに、私も参加して毎月行っている編集会議があります。先月のアクセス数はどうだったか、先月投稿した記事の反響はどうだったか、来月はどんな記事を予定しているのかなどを話し合います。

また"Facebook"や"Instagram"、"twitter"も始めています。日常的に付き合えるウェブコミュニティの人たちの獲得を目指しました。SNSの中では、フェイスブックを本命視していました。しかし、担当者たちがやりたいと声を上げたのはインスタでした。やりたいと思う気持ちは大切です。そこで、担当者たちとともにインスタも始められるよう黒潮町と話し合いました。結果、インスタは県内の自治体でフォロワー数1位です。

黒潮町公式サイトの編集会議の様子

黒潮町公式サイトのインスタグラム
フォロー＆投稿キャンペーン

—このプロジェクトの中で、どのような役割を担ったのですか?

●**岡村**／私は、黒潮町をよく知る第三者の立場で、相手の思いや希望を明確にしていく"外部化"という作業を行います。そしてコンサルタントとして、「全体最適」を追い続けるのが役割だと思っています。当事者だと物事の意思決定をする段階で様々な事情が介在するため、常に最適を意識することが困難です。そこで、様々な事情を踏まえながらも全体最適を求め、やるべきことに挑戦するための階段を作るのが私の仕事の一つだと思います。

—高知大学としては、どのように関わったのですか?

●**岡村**／UBCの活動を体験するプログラムである「UBCインターンシップ」に参加した学生に、編集会議に参加してもらいました。実はこの学生は、自身でフォロワーの多いインスタを運営しています。そこで、学生にインスタについてセミナーを行ってもらい、黒潮町の担当者にアドバイスしてもらったり、キャンペーンの企画を考えてもらったりしました。学生にとっても、自分の得意分野が活かせるいい経験をしたと思います。

—今後の抱負を教えてください。

●**岡村**／コーディネーターの仲間を増やしていきたいと考えています。大学だけでなく、地域の方、行政の方でもいい。年齢も問いません。コーディネーターという仕事は世の役に立つと思うので、もっと経験やノウハウを共有できた方が地域の課題解決に向けた環境が整うのではないでしょうか。すでに、自治体の連携コーディネーターとして、大学に出向いて地域とつなぐ役割を担う自治体職員も複数活動しています。彼らのような存在が増えればと思いますし、コーディネーター養成講座のようなセミナーも開いてみたいです。

●物部川・安芸地域サテライト・オフィス

自然科学系農学部門
地域コーディネーター　准教授

赤池 慎吾（あかいけ しんご）

静岡県出身。立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部卒業。青森大学大学院環境科学研究科修了。東京大学大学院農学生命科学研究科単位取得退学。博士(農学)。島根県中山間地域研究センター研究員などを経て、2014年に高知大学に着任。森林政策学、林業史、中山間地域振興が専門。

研究が縁ではじまった日本遺産へのチャレンジ

—印象に残っているプロジェクトは何ですか?

●**赤池**／高知県中芸地域の皆さんと一緒に取り組んだ「日本遺産」認定のプロジェクトが特に印象深いです。

中芸地域との関わりは、地域にかつて走っていた森林鉄道について、地域住民の記憶を記録したいという相談からスタートしました。まず、人文社会科学部教員で研究グループを組み、2015年から聴き取り調査を開始。私もコーディネーターとして参加し、これまでに延べ60人の方に、生まれてから今日に至るまでのライフヒストリーをインタビューしています。その後、地域活性化のために日本遺産申請に挑戦したいという話が地域から持ち込まれました。

日本遺産は、地域の文化財や伝統文化を、その歴史的な経緯や受け継がれている伝承、風習などを踏まえた「ストーリー(物語)」を作成し、地域活性化を図るというものです。このストーリーを大学が中心になって作ってほしいということで、人文社会科学部の岩佐光広准教授と私でまとめることになりました。日本遺産の審査は採択率が低く、とても難関です。しかもストーリーを考える際、森林鉄道だけではない、現在の魅力は何なのかが認定では問われました。そこで、住民の皆さんと地域の今の魅力は何なのかを考えるため、何度も協議を重ねました。かつて盛んだった林業が衰退する中で、新たに「ゆず生産」が盛んになったことは地域の特徴であり、魅力だということを、地域の人とともに再認識することができました。そして誕生したのが、「森林鉄道から日本一のゆずロードへ ゆずが香り彩る南国土佐・中芸地域の景観と食文化」というストーリーです。2017年に日本遺産の認定を受けることができました。

地元での研究発表会

—大学として中芸地域に関わったことの意義は何ですか?

●**赤池**／日本遺産申請のきっかけになったインタビュー調査は、地域を学ぶ手法としてもすごく意味があるのではないかと思い、人文社会科学部ではインタビュー実習を開始しました。学生は講義でインタビュー手法や地域のことを学んだ後、

現地を見学。実際にインタビューを行い、文字起こしとレポートを作成する。一人一人の人生に向き合うという、これまでにはない地域との関わり方の重要性を学生たちも認識できたようで、インタビュー調査のための地域活動団体を学生自ら立ち上げました。

―今後、取り組んでいきたいことは？

●赤池／今、私が力を入れているのが、台湾との連携です。台湾も日本同様、農村部の過疎化や都市への人口集中といった課題を抱え、地方創生を進めるために大学も地域に関わる取組を始めています。そこで昨年末に国立高雄科技大学と交流協定を結び、情報を共有して、互いに学生や教員が一緒に何かできないかと模索を始めたところです。

具体的には2020年度から、私が担当する高知県安芸地域と岡村先生が担当する幡多地域で実習を

学生と現地見学（エヤ隧道）

スタートします。両大学の学生が互いの「地方創生」を学ぶことで、それぞれの大学の地域連携を発展させる可能性があるのではないかと期待しています。国境を越えて、高知と地域のつながりを作っていくことも、大学ならではの地域貢献だと考えています。

大学の教育や研究に裏付けされた社会貢献

―印象に残っているプロジェクトは何ですか？

●大﨑／高知市の政策である「れんけいこうち広域都市圏構想」の中で行っている統計データの研修事

●高知市・仁淀川地域サテライト・オフィス

総合科学系地域協働教育学部門
地域コーディネーター　講師

大﨑（おおさき）　優（すぐる）

高知県出身。高知大学人文学部卒業、同大学院総合人間自然科学研究科修士課程修了。修士（経済学）。財団法人（現公益財団法人）高知県観光コンベンション協会等を経て、2014年より高知大学に着任。専門は産業連関表を活用した地域経済構造分析、自転車活用によるまちづくりなど

業です。本事業の中での私の役割は、高知市と地域協働学部の中澤純治准教授のコーディネートを行うことと、事業実施の支援です。

れんけいこうちでの研修風景（photo by Koji Arimitsu）

「れんけいこうち」は高知市と県内の33市町村が連携協定を締結し、様々な事業を横つながりで実施する広域連携の取組です。「れんけいこうち」を始めるにあたり、高知市から他地域との経済的なつながりを定量的に示すことができないかとの相談を受けました。そこで地域の産業間の取引構造を表す産業連関表を専門とする中澤先生に相談し、地域間の経済的つながりを表現するように産業連関表を拡張する研究を実施していただきました。この研究結果に基づき、高知市は「れんけいこうち広域都市圏構想」実施に向けた取組を加速していきました。大学の研究が行政の政策作りに密接に関わった事例ととらえています。

また、「れんけいこうち」は広域連携の取組ですので、パートナーである他市町村もこうした経済的つながりの重要性や事業評価について共有しておく必要があります。この点は高知市にも理解していただき、「れんけいこうち」の事業として、統計データに基づいた政策立案や政策評価の重要性と、そのためのデータ活用に関する研修を開催することになりました。これが統計データ活用事業です。

―このような事業に高知大学が関わることの意味は何ですか？

●大﨑／地域経済活性化を目指す地域社会への貢献としての意味があると思います。大学が行う社会貢献は、研究や教育が根幹にあるべきだと思います。もちろん、研究成果を活用されるだけでは、自己の研究にとってプラスにはならないことも多いと思います。例えば産業連関表を推計し提供するだけでは、確かに研究成果は活用されていますが、双方にとって次の段階につながらないと思います。

「れんけいこうち」の場合、産業連関表を提供するだけでなく、政策の根拠資料として活用され、さらに職員さんのための研修事業へとつながっています。研修の成果として、産業連関表に取り組む人が育ってくれれば、真の意味での大学の地域貢献になると思います。こうした研究を活かした人材育成へとつながっている点で、私自身も本事業に思い入れがあります。

―今後、取り組みたいことは何ですか？

●大﨑／これまでと変わらず、地域からの要請に応えることが最優先だと思っています。一方で、これまでのUBCとして経験を活かして、潜在的な課題解決に向けた提案もしていきたいと思っています。今、感心を持っている分野として観光分野があります。現在の観光政策のターゲットは観光客数になっています。しかしながら、人口減少社会においては人数をターゲットとするよりも、客単価を上げることや、リピーターを生み出すことが大切だと考えています。こうした考え方を各地で提案するとともに、実際に観光事業に携わる方たちと情報交換、情報共有を実施しています。今後、地域の方や住民の方から関心が寄せられれば、自身も加わるような形でコーディネートしたいと思っています。

学生の地域活動の様子（ひな人形の飾りつけ）
（photo by Suguru Osaki）

大学の持つシーズで都市と農村の協働を実現

―印象に残っているプロジェクトは何ですか？

●梶／研究と地域をつなげたケースと、私の専門性を活かしたケースの2件を紹介します。

中山間地の本山町にある集落活動センター汗見川の支援に関わったケースでは、高知大学の教員をマッチングしました。集落活動センターは地域住民が主体となって、中山間地域の課題やニーズに応じて様々な集落活動に総合的に取り組む高知県独自の仕組みです。

●嶺北地域サテライト・オフィス

総合科学系地域協働教育学部門
地域コーディネーター　講師

梶（かじ）　英樹（ひでき）

大阪府出身。関西大学法学部卒業。英国バーミンガム大学公共政策大学院公共経営学修士課程修了。日本福祉大学大学院社会福祉学研究科修士課程在学。大阪府庁、公益社団法人セーブ・ザ・チルドレンなどを経て、2014年に高知大学に着任。主な研究テーマは、ファンドレイジング戦略・非営利組織の経営に関する研究など。

本山町の特産品の紹介・PR活動（大阪市西区）

汗見川では交流人口の拡大などのニーズを抱えていました。そこで大学とどういう連携ができるかを、課題の本質について共に考えていく形で地域と寄り添いながら、地元の皆さんと何度も会議を重ねていました。

そのプロセスの中で、交流人口について使える地域の資源は何かを考えた時、目に留まったのが白髪山です。白髪山は江戸時代、高級ヒノキ材を産出し、大阪方面で販売していたという歴史があります。これを現代の交流に活かせないかと着想し、歴史地理学が専門の学内研究者に話を持ち込みました。教員によって白髪山と大阪との木材流通に関する調査を行ったところ、大阪市西区には「白髪橋」や土佐稲荷神社、鰹座橋など、本山町や高知に由来の名前が残っていることがわかりました。

この歴史的なつながりを活かし、集落活動センター汗見川は大阪市西区の関係者と交流をスタートすることになりました。大阪市西区は人口が急増している地域で、コミュニティの希薄さなど人口増だからこその課題を抱えています。本山町の農村部の課題と大阪市西区の都市の課題を、それぞれの持つ資源を活かして双方向で解決に向け、協働しようという新しい交流の形です。大学が持つシーズをうまく活かしたケースになりました。

大阪市西区「にし恋マルシェ」イベントでの
丸太切りレースを通じた交流

地域には、資金不足であきらめざるを得ないような思いやアイデアが多数あります。そこで、近年注目されているクラウドファンディングを資金調達方法の一つとして提案。さらに、成功するために何が必要なのかなどを、嶺北地域はもちろん、県内全域で相談に乗っています。クラウドファンディングの出資者の行動には特徴があり、私は出資者の行動分析を研究し、論文も執筆しました。その知識を活かしたアドバイスを、地域の団体や自治体に対して行います。

クラウドファンディングは、学生たちが何かをやってみたいと思ったときに資金調達の手段としても有効です。学生や地域の挑戦を資金的に後押しする仕組みとして、大きな可能性を感じます。

―今後の抱負は？

●梶／キーワードとして、「持続可能な地域づくり」を意識して活動したいと思っています。高知県では産業振興や雇用促進、所得向上など経済的な課題解決がよく求められます。それは大事なことですが、地域の持続可能性で見た場合、それだけでは格差の拡充など負の影響を受けてしまうことも考えなければなりません。誰一人置き去りにならないことを意識して、より一層行政や企業、団体の連携に大学がコミットできるよう、コーディネートしたいと思います。

―先生の専門性を活かした取組とはどういうものですか？

●梶／私はこれまで、NPOや非営利組織の経営について、実務も含めて携わってきました。その経験から、資金調達の分野でのサポートを行っています。

UBCの活動の軌跡を1冊に『地域コーディネーションの実践 高知大学流地方創生への挑戦』

4人のUBCが編著者として、5年間にわたる活動をまとめた書籍を出版。世界的にも珍しいUBCの取組を通して、地域コーディネーションとは何か、地域活性化につながる手法とは何かなどを、具体的な事例を交えながら紹介します。

「本書に載っている『コーディネートあるある』を、我々のような大学コーディネーター職だけでなく、地域活動の実践者や自治体行政職員、地域活動を志す学生たちで共有してもらうことで、地域の問題解決の役に立てれば…」とUBCの一人は話します。

『地域コーディネーションの実践 高知大学流地方創生への挑戦』見洋書房

〈特集2〉

土佐あかうしの今

高知県独自の和牛である「土佐あかうし」の研究に取り組んでいる、総合科学系生命環境医学部門の松川和嗣准教授。希少な家畜品種を後世に残そうと、非常に先進的な研究が進められています。

土佐あかうしは注目の的！しかし…

牛肉といえば「霜降り」が一番！というのは少し前までの話。近年、肉のうま味を感じられる「赤身肉」が注目されています。こうした中、クローズアップされているのが、高知県で育まれてきた「褐毛和種・高知系」、通称「土佐あかうし」です。黒毛和種と比べると脂肪が少ないのが特徴で、「ヘルシーなお肉」「肉本来の味がする」と全国的に認知されるようになってきました。今では、東京や大阪の高級レストランで驚くような価格で取り扱われています。

高知大学は全国で唯一、褐毛の牛を専門的に研究している大学。農林海洋科学部のキャンパス内には、牛たちが自由に遊ぶ放牧場もあります。研究に取り組んでいる松川先生が、土佐あかうしの現状を話します。

「私が高知大学に赴任した平成21年には約2700頭いた土佐あかうしですが、平成26年には1600頭まで数が減少してしまいました。この危機から脱しようと、その年、高知大学と高知県は土佐あかうしの増頭と生産振興に関する覚書を締結しました。その後、受精卵移植などの取組の結果、現在では2300頭まで回復しています。」

人気があり、頭数も増えている土佐あかうしの未来は明るい…と思われがちですが、実は持続的な生産を行うためには課題が山積みです。その課題を解決するために一研究室の活動だけでは難しいと考えた松川先生は、全国的な研究ネットワークを構築するため、平成28年、農林水産省の事業に応募し見事に採択。「褐毛和種生産振興ネットワーク」を設立しました。褐毛和種・熊本系（くまもとあか牛）の生産地である熊本県をはじめ、宮城県、高知県、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構、理化学研究所、大学、企業、生産者などと連携し、共同研究を行っています。

あかうし版「ジュラシック・パーク」!?

松川先生の専門は家畜繁殖学で、「動物を増やしたり、希少なものを保存したりするのが、私の研究のバックグラウンド」。これまで力を入れてきた研究の一つが、土佐あかうしの精子や細胞の保存です。しかも、通常とは違う斬新なアプローチで取り組んできました。

「一般的に精子や細胞は、マイナス196度の液体窒素内で凍結した状態で保存します。一方、私達が研究しているのは、凍結した後に乾燥させるフリーズドライという技術です。精子や細胞は死にますが、ジュラシック・パークという映画の中で恐竜を復活させたように、ゲノム（生物の持つ全遺伝情報）から牛を誕生させることができるはずです。」

現在、この手法を牛に使っている研究者は松川先生のみ。この研究を進めてきた理由は、フリーズドライにすると、常温で簡単に保存できるという大きなメリットがあるからだといいます。

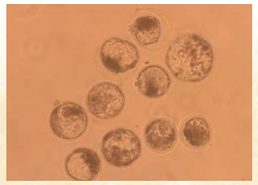
「近年、大地震や気候変動を背景にした洪水など、自然災害が相次いでいますが、こうした際には、貴重な遺伝資源を失いやすいものです。高知でも近い将来、南海トラフ地震の発生が懸念されています。精子を凍結保存した場合、液体窒素のタンクは400ℓほどもあるので、緊急の際に抱えて逃げるわけにはいきません。これに対して、フリーズドライなら移動や分散保存が簡単になります」と研究の意義を語ります。

さらに、液体窒素は気化していくため常に補充する必要があり、そのためには多くの電力が必要になります。その点、フリーズドライは常温で保存できるため、環境負荷の低減に役立ちます。土佐あかうしのフリーズドライ保存の研究は、他の家畜や野生動物にも応用可能で、国際的に注目されている持続可能な開発目標（SDGs）に貢献することができる研究だと考えられています。

現在、フリーズドライの精子を使った受精卵からの子牛誕生の実現は、もう間近とのことです。

フリーズドライ後、粉状になったウシ精子

マニピュレータで卵子に精子を注入



10個の胚が発生！

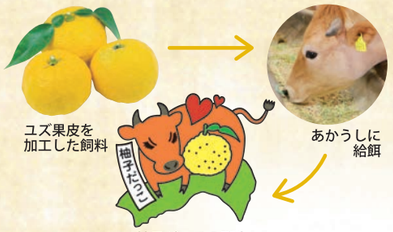
新ブランド「柚子だっこ」で高付加価値化を目指す

土佐あかうしの抱える課題のもう一つは、生産者が減少し新規就農者が少ないこと。そこで松川先生は、生産者の収入増加を目的とした土佐あかうしの高付加価値化についての研究にも取り組んでいます。ブランド名は「柚子だっこ」。「ユズの皮をエサに混ぜて育てた牛のことです。ユズを体の中に抱えているというイメージから、『柚子だっこ』と名付けました」と松川先生。高知大学では、ユズを混ぜたエサでブリを飼育し、香りを良くし、脂もさっぱりさせて、付加価値を高めた研究があります。「柚子だっこ」はこれにならったものです。

じつは研究スタート時、松川先生は半信半疑だったとか。ブリと比べると、牛は飼育できる数が各段に少なく、個体差もあるので、果たして効果があるのか…と思っていたそうです。ところが、結果は大成功。しかも、効果のほどが非常にわかりやすかったといいます。

「まず肉質が変わり、脂肪のくちどけが良くなって、さっぱりした味わいになりました。これは不飽和脂肪酸が増えて、脂肪の溶ける温度が低くなったことによるものです。不飽和脂肪酸の中でもオレイン酸の含有量が増え、食べる人の健康にもいい、というメリットもあります」

健康効果は牛自身にも見られました。肉牛として肥育される牛は、体に負担とストレスがかかります。しかし、柚子を与えると血液検査から体への負担が少なくなり、さらに遺伝子レベルでストレスが低減されることが分かったのです。それらの効果は、柚子を与えることで胃の中で有益な微生物が増えることによるもの、といったことが明らかになりました。「試食会でも好評だったので、農家さんに利用いただければ」と、松川先生は「柚子だっこ」の将来性に期待しています。



ユズ果皮を加工した飼料

あかうしに給餌

柚子だっこの誕生

優しく採血し、実験室で血液検査をおこなう

有名フレンチシェフによる本格的な試食会

「あかうし研」に入ると、日本でここだけの研究が！

松川先生の研究室、通称「あかうし研」では最近、土佐あかうしの研究をしたいという動機から高知大学を志望した、という学生も見られるようになってきたそうです。

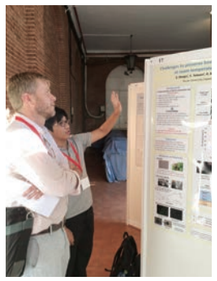
学生たちはみな、学びに積極的。日々の研究に加えて、「柚子だっこ」の取組を発信するためのクラウドファンディングを実施したり、東京での食品フェアにグッズを作って参加したりと、幅広い活動をしています。4年生には学会で発表する機会があり、大学院生の中にはイタリアに留学し、スペインの国際学会に参加したケースもあります。

「大学では90頭ほどを飼育しています。こうした現場があるのも大きな強みで、貴重な体験になるはずです」と松川先生。「あかうし研」には高知県庁に就職し、畜産関係の仕事に就いた卒業生も。高知県では、担い手の増加を目指し、令和2年度から専用牛舎での研修を開始しますが、卒業生はその取組にも関わり、奮闘しているとのことです。

「私の研究室では、生命の誕生からその終わりまでを真摯に向かい合うことになります。そういう環境で、未来を創造する学生達が、羽ばたき活躍するために、土佐あかうしからも学んで欲しいと思います。」

高知大学でしかできない、貴重な土佐あかうしに関する研究。松川先生と教え子たちは、今日も牛たちと向き合い、データの蓄積に励み、新たな発見を目指しています。

お揃いの法被姿で学生達が「柚子だっこ」をPR（アグリビジネス創出フェア・東京）



国際学会で研究成果を発表する大学院生（スペイン・マドリッド）

総合科学系
生命環境医学部門
准教授

松川 和嗣（まつかわ かずつぐ）

信州大学繊維学部卒業。博士（工学）。専門は家畜繁殖学、発生工学。「現在、土佐あかうしに限らず、世界の家畜を対象とした『家畜保全学』という新しい学問分野を展開しようとしています。詳しくは農林海洋科学部HPの動画（夢ナビライブ）をご覧ください。」

「地域観光チャレンジ2019」金賞受賞

マイナスをプラスに変える

ツアー企画で地域の課題を解決したい！

黒潮町津波避難タワー見学

塩づくり体験（左）と鰹のタタキの食事（上）
※写真はイメージです

“防災”がテーマのユニークなツアー

高知県西部に位置し、太平洋に面した豊かな自然に恵まれた町、黒潮町。しかし一方で、南海トラフ巨大地震発生時に日本一高い津波の到達が想定される地域としても有名です。地域協働学部3年の拜藤紘希さんは、そんな「津波のまち」黒潮町のイメージを逆手に取ったツアーを考案。「地域観光チャレンジ2019」において、最優秀の金賞を受賞しました。

「地域観光―」は四国4国立大学とJR四国の連携事業で、四国の地域活性化を目的に地域振興・観光振興・人材育成について連携協力し、地域に人を呼ぶ旅行プランの企画に取り組もうというものです。拜藤さんが企画したツアーは、黒潮町内の津波避難タワーの見学や防災プログラムへの参加のほか、カツオのたたきの食事や塩づくり体験などが盛り込まれた、防災学習と海の町の魅力を体験できる1泊2日の行程です。拜藤さんを事業の参加へと駆り立てたのは、黒潮町への思いからでした。

「1年生の時、学部の実習で黒潮町を訪れ、その中で地域の皆さんや行政の方が頑張っている姿を見る一方、難しい現実も感じたのです。そこで、町のために何かできないかと考えていました。観光に特に興味があったわけではないのですが、JR四国さんの力を借りて、観光ツアーを使って課題を解決できるのではないかと思い、参加を決めました」

地域を変えるという思いで地域と一丸に

拜藤さんが先生に進められ、事業に参加したのは2年生の時です。

「私の専攻は行政の財政学なので、観光は全くの分野違い。やるからにはしっかり勉強しようと考え、観光人材育成のための『こうち観光カレッジ』も受講しました。社会人が参加するプログラムなので、大学の学びとは違う刺激を受けることができました。また、『地域観光―』の一環で行われた研修では、他大学の学生と一緒に観光について学んだりもしました」

同時に黒潮町に通い、ツアー内容を深めていったといいます。

「津波予想は黒潮町の観光客減少という課題を生み出しました。その一方で防災対策の先進地として全国各地から多くの視察を呼び込むきっかけとなりました。また、地域のNPO法人が非常に優れた防災学習のプログラムを作り上げていました。そこで、この視察需要をうまく活かして、防災学習をテーマにしたツアーを企画しました。黒潮町は津波が来る危ない場所ではなく、きちんと対策をしている安全な地域だということを、多くの人に知ってもらいたいという思いを込めたツアーです」

ツアー企画の完成までには、行政の担当者や地域の団体にヒアリングをし、協議を重ねていきました。

「行政やNPO法人の方、あるいは地域の人と話し合いながら、少しでも黒潮町の活性化に役立てられるようなツアーにできないか一緒に考えていただきました。本当に、黒潮町と僕とがチームになって、ツアーを通じて地域を変える、四国を変えるという思いで一丸となって作りました」

拜藤さんが考えたツアーは、「地域観光チャレンジツアー」として、他の学生が企画したツアーとともに1月から販売を開始。5月16、17日に催行される予定です。

「今回の経験で、思いを持ってやれば不可能なことはないと思うようになりました。そして、人とのつながりが結構でかいなと実感しています。人と人をつないでいくことで、解決のための糸口が見つかることを学びました」

これからは就活にも力を入れるという拜藤さん。今回の経験は将来の仕事にもきっと役に立つ、と話します。

地域協働学部3年
拜藤（はいとう） 紘希（ひろき）さん

広島県出身。地方創生推進士（※）。ツアーを企画するなど活動的な印象があるが、実は座学を一生懸命やるタイプと自己分析する。「大学でいろいろな分野を勉強してきたことで、多くのことを考え、行動できるようになったのだと思います。体を動かすだけでなく、座学も大切だと思います」

※高知を“知り”、地域と“会い”、仕事を“体験”し、協働する教育プログラムを受講し、これからも地域課題と対峙し社会の発展に貢献したいという志を持った学生に付与される称号。文部科学省の「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」（COC＋）として高知大学が代表校となり進めている事業「まち・ひと・しごと創生 高知イノベーションシステム」の一環として行っている認証制度。

学内外でキラッと光る高知大生をピックアップ！

キラ星高知大生

がんばる！先輩

社会で活躍するOB・OGを紹介

松木 亮（42歳）
人文学部経済学科 1999年卒業

FMラジオ局のDJとして声に包んで情報発信

大学ではどのようなことを学びましたか？

地元の大学で学びたいと考え、高知大学に入学しました。日本人の戦後思想に関するゼミを専攻し、プレゼンやディベートを体験したことが大きな力になったと思います。県外の友人がたくさんできたのも良かった。音楽にくわしい友人に教えてもらったことは、いまの仕事にすごく活かされています。彼は神戸出身で、阪神淡路大震災のちょうど1年後、実家に遊びに行きました。復興前の神戸の街の光景は衝撃的で…。いまも震災の日が近づくと、その時の体験を番組で話すようにしています。

卒業後の進路について教えてください

いったん県外の会社に就職したんですが、いつかは高知に帰りたいという想いが強く、Uターンしてエフエム高知に入社しました。営業職として採用されましたが、試用期間後、配属されたのは放送制作部。社内研修を受けて、4か月後にはニュース原稿を読んでいました。元々、DJやアナウンサー志望というわけではなかったので、当初、滑舌などでとても苦労しましたね。

配属されて以来、異動は一度もなく、20年選手になりました。いまは朝7時30分から10時55分までの生放送『Hi-Six Shake! Shake! Shake!』の木曜・金曜パーソナリティーなどを担当しています。

仕事の面白いところ、難しいところは？

番組は企画から担当することが多く、素材やネタ集め、インタビュー収録なども行っています。どう転がるのかわからないのがラジオの魅力だと思うので、台本なしでのびのび喋るのが好きですね。今年の3月まで7年間続けてきた『THEこうちユニバーシティCLUB』は、その最たるものでした。高知大学の先生や学生さんをお招きし、研究や活動内容を語っていただく番組です。当初、自分なりに勉強して収録に臨んでいたんですが、途中から考えを変えました。「知らない」というスタートラインに立つほうが、リスナーの皆さんが聴きやすいと思ったんです。自分自身が講義室の最前列にいるような感覚で話をお聞きすると、先生の熱量が尻上がりに高くなっていく感じがしたり、とても勉強になりました。なお、『THEこうちユニバーシティCLUB』は4月からタイトル・内容をリニューアルして毎月第4金曜日の『Hi-Six Shake! Shake! Shake!』内で、10時15分から放送予定です！

ラジオの魅力はなんですか？

よく聞かれますが、じつはこの質問が番難しい（笑）。「ほかの作業をしながら聴ける」「生放送のドキドキ感がたまらない！」とか、場所やシチュエーション（そして何より気分）がバラバラなだけに、ラジオを聴く人それぞれにいろんな魅力を感じていただいていると思うからです。でもこの「自分だけが体感している魅力」こそラジオの魅力なのかもしれません。

株式会社エフエム高知
放送制作部
松木（まつぎ） 亮（りょう）

高知県出身。1995年、高知大学に入学。2000年、エフエム高知に入社。「いまは一周回って、ラジオが新しいメディアになりつつあります。エフエム高知は3月から、ネット回線を通じてスマホやPCで聴ける無料サービス『Radiko（ラジコ）』で配信をスタートしています。ぜひ聴いてくださいね」

キャンパスライフひと言アドバイス

興味が湧くことがあれば、周りの目を気にしないでやってほしい、と強く思います。30代以降になって同じことにトライするのと、感じ方は絶対に違う。20歳前後の若いときにしか得られないことは、のちに大きな力になると思います。

普段ラジオを聴かない方、感受性豊かな10～20代の方にこそラジオで新しい体験を！

Kochi University Topics

教育学部 阿部鉄太郎講師
ワインのイメージを彫刻で表現する芸術活動

2017年から、ワインのイメージを彫刻で表現する芸術活動をはじめ、これまでさまざまな彫刻作品を制作してきている教育学部の阿部講師が、このたび、南国市の井上ワイナリー（本学と包括的連携協力に関する協定を結んでいる井上石灰工業株式会社）製造のワイン「TOSA稲生」を題材に、彫刻作品を制作しました。

題目「天地人-稲生の浜風-」と名付けられたこの作品は、まだ若くこれから大地に根をはっていく葡萄木（富士の夢）が、太平洋からの優しい浜風に揺られ、未来への希望や夢に満ち溢れている感じを人体具象表現で寓意化しようと試みた彫刻作品です。

現在は、高知市との姉妹都市であるアメリカ・フレスノ市のワイン（カリフォルニア州立大学フレスノ校醸造科の製造）を題材にした彫刻作品を制作中です。

阿部鉄太郎講師

岡山大学の教育学部・同大学院を卒業後、岡山や兵庫県などで美術教員として勤務し、2009年に高知大学へ着任。現在、教育学部学校教育教員養成課程美術教育コース講師。日展会員。

彫刻作品「天地人ー稲生の浜風ー」

ワイン「TOSA稲生」

高知大学自然科学系農学部門の藤原拓教授を含む産学官連携チームが「STI for SDGs」アワードで『優秀賞』を受賞

農学部門の藤原拓教授を含む産学官連携チーム（高知大学、香南市、高知県、前澤工業株式会社、日本下水道事業団の5団体）の取組である「汚水処理の持続性向上に向けた高知家（こうちけ）の挑戦～産官学による新技術開発と全国への展開～」が、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）が主催する「STI for SDGsアワード」において令和元年10月31日『優秀賞』を受賞、令和元年11月15日に授賞式が行われました。

同アワードは、科学技術イノベーション（STI）を活用して社会課題を解決する地域における優れた取組を表彰し、取組事例を発信することで水平展開を図り、SDGsの達成に貢献していくことを目的として令和元年度に新たに創設されたものです。

受賞した取組は、高知大学の研究シーズをもとに、反応タンク内に設置した溶存酸素濃度計を用いて、送風量と循環流速を自動制御する汚水処理新技術「オキシデーションディッチ法における二点DO制御システム」を産官学の連携により開発したもので、この技術は香南市野市浄化センターで電力を3分の1に抑え、処理時間を半分に減少させ、処理コストも削減できることを実証しました。この結果を踏まえ、同市内で本技術を2か所に導入した他、さらに他の自治体へも水平展開を行い、人口減少が進む地方都市における汚水処理の持続性を向上させました。

上下水道分野では唯一の受賞となった本取組は、選考委員会において、地道な研究により確立された基盤技術を産官学の共創により実用化につなげ、汚水処理能力の向上、持続可能なまちづくりを実現した好事例として高く評価されました。

高知大学が中心となり産官学で開発した、従来よりも省電力・処理時間短縮・低コストの新しい下水処理システムが、全国に広まりつつあります。

「STI for SDGs」アワード授与式

産学官連携チームの集合写真

該当するSDGsロゴマーク

学生広報スタッフ制度を新たに創設

本学の広報活動に学生ならではの意見や発想を取り入れることにより、より多様な視点からの大学紹介を可能とし広報活動の一層の充実を図ることを目的とし、令和元年度に新たに「学生広報スタッフ制度」を創設しました。

本制度は更に、学生自身が本学の公式な活動への参画を通じて本学への理解を深め、参画する学生同士の交流を通じて、学生生活における豊かな交友関係の形成に資することも目的としています。

昨年12月４日には第１号の学生広報スタッフ任命式が執り行われ、学長から委嘱状と活動証が交付されています。

教育学部附属中学校が第32回全日本マーチングコンテストで銀賞を受賞！

教育学部附属中学校吹奏楽部が、第32回全日本マーチングコンテスト四国支部大会（中学校の部）において優秀な成績をおさめ、大阪城ホールで開かれた全国大会「第32回全日本マーチングコンテストに出場の結果、見事、銀賞を受賞しました。

演奏や音楽を表現する動きの美しさを競い合うこの大会で、初出場ながらも、堂々たる演奏・演技を披露した生徒たちです。

次世代地域創造センター 地域イノベーション部門に、UIC、URAを採用

UICの恒川典之特任教授（左）
URAの松浦孝範特任准教授（右）

次世代地域創造センターは、地域イノベーション創出を目的とした組織的な産学連携の推進及び知的財産に基づく研究成果の活用を担うコーディネーターUIC（University Innovation Coordination）を令和元年4月に採用、また、令和2年1月には、競争的資金獲得支援、共同研究・受託研究等推進支援、研究プロジェクトの企画・推進などの活動を行い大学における研究活動の活性化を支援するURA（University Research Administrator）を採用し、地域社会の相談窓口として、地元企業及び他機関との更なる連携強化に取り組んでいます。

教育学部教員就職率全国2位を達成

文部科学省より公表される教育学部教員養成課程の大学別就職状況（国立の教員養成大学・学部及び国私立の教職大学院の平成31年3月卒業者及び修了者の就職状況等について）において、高知大学の平成31年3月卒業生の教員就職率（注）が、鳴門教育大学に続いて全国2位の快挙を達成しました。なお、幼児教育コース2期生については全員が保育士・幼稚園教諭採用試験に合格しています。

（注）ここでいう教員就職率とは卒業者数に対する正規採用者数と臨時的任用者数の合計の割合を意味するもので、卒業者数から大学院への進学者数と保育士の就職者数の合計を除いた場合には全国5位となっています。

食の6次産業化プロデューサー（食Pro）最高段位レベル6に国内初認定

土佐FBCの松田高政特任講師

国家戦略・プロフェッショナル検定「食の6次産業化プロデューサー（食Pro）」キャリア段位制度の最高位となるレベル6に、土佐FBCの松田高政特任講師が国内で初めて認定されました。

食Pro制度とは、生産（1次産業）、加工（2次産業）、流通・販売・サービス（3次産業）の一体化や連携により、地域の農林水産物を活用した加工品の開発、消費者への直接販売、レストランの展開など、食分野で新たなビジネスを創出する方の職能レベルを認定する制度です。

駐日アラブ首長国連邦（UAE）特命全権大使が高知大学を訪問

↑前列中央：
（左）アルアメリ閣下、
（右）櫻井克年学長

海洋コア総合研究センターのサンプリング室の様子→

駐日アラブ首長国連邦（UAE）特命全権大使のカリド・オムラン・スカイット・サルハン・アルアメリ閣下が、高知県訪問の一環として高知大学に来学し、学長を表敬訪問しました。表敬訪問の後には、本学学生及び教職員を対象に「UAEについて」と題した講演を行い、UAEと日本が常に良好な関係を維持していることや、UAEは寛容、尊敬、共存、思いやりに基づいた文化的、知的、社会的な多様性を育むことを推進しており、この「多様性と寛容」を大切にする精神がUAEの飛躍的経済発展の原動力となっていることの紹介がありました。また、その後は本学物部キャンパスの海洋コア総合研究センターを訪問し、コア保管庫やサンプリング室等を視察し、サンプリング室では実際にアラビア海で採取されたコア試料を見学し、徳山センター長と意見交換を行いました。

高知大学から支援のお願い

■高知大学修学支援基金

本基金は、修学意欲を持ちながら、厳しい家計状況により修学困難な学生に対して給付する奨学金として活用します。

■高知大学さきがけ志金

高知大学の理念である『地域社会及び国際社会に貢献しうる人材育成と学問、研究の充実・発展を推進する』ため、これらに対する事業の支援とその環境の更なる整備・充実を図ることを目的とします。

【対象者】
本資金の趣旨に賛同いただける個人・法人・団体等

【金　額】
個人による寄附金につきましては、1口1千円を単位とします。法人・団体等による寄附金につきましては、1口1万円を単位とします。支援とその環境の更なる整備・充実を図ることを目的とします。

本志金の趣旨をご理解いただき、なにとぞ複数口でのご協力をお願いします。

「高知大学高知大学修学支援基金」及び「高知大学さきがけ志金」（教育・研究・社会貢献活動による支援）に寄附を行う際に、インターネット決済サービスによる「クレジットカード決済」、「コンビニ決済」、「Pay-easy決済」がご利用いただけます。

■高知大学古本募金

読み終わった本で高知大学をご支援ください。高知大学古本募金は、皆様から読み終えた本・DVD等をご提供いただき、その査定換金額が高知大学に寄附される取組です。古本募金を通じて集まった寄附金は「高知大学さきがけ志金」として受け入れ、本学の教育研究・社会貢献活動の向上のために役立てられます。

〈 お問い合わせ先 〉
0120-29-7000（受付 9:00～18:00）
高知大学古本募金　検索
運営協賛：古本募金きしゃぽん(嵯峨野株式会社)

〈 お問い合わせ先 〉 **高知大学総務部総務課**
TEL：088-844-8100　FAX：088-844-8738　E-mail：sj02@kochi-u.ac.jp
URL：https://www.kochi-u.ac.jp/outline/kouhou/supporter/kikin_bokin.html

■ オープンキャンパス 2020

7月18日(土)・19日(日)

オープンキャンパスを開催

2020年度のオープンキャンパスは、7月18日(土)、19(日)に開催いたします。
企画の内容、日程等の詳細は、決まり次第、順次ホームページに掲載します。

朝倉キャンパス

岡豊キャンパス

物部キャンパス

令和2年度 学年暦（予定）

4月2日(木)	新入生オリエンテーション
4月3日(金)	入学式
4月6日(月)	在来生オリエンテーション
4月7日(火)～4月8日(水)	第1学期履修登録期間
4月7日(火)	新入生定期健康診断
4月10日(金)	第1学期授業始
8月3日(月)～8月7日(金)	第1学期試験期間
8月8日(土)～8月31日(月)	夏季休業
9月1日(火)～9月30日(水)	特別授業期間
9月18日(金)	秋季修了式
9月24日(木)～9月28日(月)	第2学期履修登録期間
10月1日(木)	創立記念日
10月2日(金)	第 2学期授業始
10月9日(金)	秋季入学式
10月17日(土)～18日(日)	南風祭(岡豊キャンパス)
10月31日(土)～11月1日(日)	黒潮祭(朝倉キャンパス)
11月1日(日)	物部キャンパス1日公開
11月2日(月)	黒潮祭休講
12月26日(土)～1月4日(月)	冬季休業
1月15日(金)	休講(大学入学共通テスト準備)
1月16日(土)～1月17日(日)	大学入学共通テスト
2月1日(月)～2月5日(金)	第 2学期試験期間
2月6日(土)～2月28日(日)	特別授業期間
3月1日(月)～3月31日(水)	学年末休業
3月23日(火)	卒業式・修了式

■ 高知大学のラジオ番組が4月にリニューアル

FM高知(81.6MHz)の朝の生ワイド番組「Hi-Six Shake! Shake! Shake!」内で、毎月第４金曜日の10時15分から、高知大学の教育、研究、地域貢献等のホットな情報をお届けします。

平成25年1月から令和2年3月末まで放送の「THEこうちユニバーシティCLUB」については、高知大学のHPで過去の放送を全てお聴きいただけます。radikoもしくはwiz Radio(ラジオ視聴用アプリ)をダウンロードいただくと、FM高知の放送が、ネット回線を通じて全国どこででもスマホやパソコンで視聴できます！

■ 広報誌Lead2020春号アンケートご協力のお願い

アンケートにご協力いただいた方の中から抽選で5名の方に高知大学オリジナルグッズをプレゼントします。(当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます)
右のQRコードを読み込み、表示されたアンケート画面にてご回答ください。
回答期限：令和2年7月末

新型コロナウイルスに対する本学の対応については、大学ホームページのトップページ、「重要なお知らせ」に最新情報を掲載していますので、ご覧ください。

●お問い合わせ先　皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。

高知大学
Kochi University

高知大学総務課
高知大学 検索
http://www.kochi-u.ac.jp/

TEL.088-844-8643 FAX.088-844-8033 〒780-8520 高知市曙町2-5-1 E-mail：kh13@kochi-u.ac.jp

バックナンバーはこちらからご覧いただけます。

※誌面の学年と役職は制作時のものです。